河海抄

榜船
椎本

十七

へ利2
1272
17

帝室博物館藏書

1272
17

河海抄巻第十七

正六位上物語博士源惟良撰

榊姫

第廿八　巻名　榊姫

一名優婆塞　優婆塞ハ仏ニ帰依スル人ヲ云

天武天皇ノ御女ニ坂上郎女ト云ヒ歌人アリ

宇治文　桐壺帝ノ才八皇子ナリ　八宮又号優婆塞文

女院大后女

其比ハ今上在位時也　河海紀梅夫人物語草本ノ異

多ク不思ノ事ヲ

見ルニ乃御ヲ乃ヲ

女ヲトモワカヌヲ

養育　ヤシナフ　ハグクム　カヒミル

有　アリ

硯のうみのみつからみえぬよりおもくわらさまる
ち佛乃れかさりせ　将弘荘厳也
又らあん（篇）はさ（寔）
玉篇梁大同九年三月廿八日黄門侍郎兼大学博士顧
野王撰字廿万九千七百七十字三十巻　五百六部
ここつきにいかれ候もうのりらく
硯ハ文殊の御眼也されハ眼石とかけり文を綴く
硯石とハ書也是ハ仍け面ふ物紙とさ候也菅家御日
記まも硯面不書とかり
（菅家）君か石乃面ふ物いてさりさ物比やうしハ花とけりや
れくしもてゆらうさとり定むふ殺てとより侍る入のむ
故中務丈の小分ら也なく後ちいさんさこたらさぬさ

らして三条右大臣殿よりこし待まいれつら机らしく
ちて八流乃よ分りハとくて給り分れて枝小分れ
まうりけて丸太とやうくえ候んるかと申ち候
ひきあかるゆ候ともと紫やうくつうも紫のありちたり
いてありにし右（仲平）大臣殿御乃さとゆ候ふ搦りなり色ん
机の仲とをくしさいんさ給ともくゆるてんにて候ゆさ物
ゆや此付されんとの文よきんかちよりは小かち色れ
附りかやと茶乃れもとる
ちむ人参とを受けり小分ふなる今ハ給る文のる
文乃小逆事
（拾遺七）とりよりありふくいくしもとて紙を分ともうてえけ
鳥ハ江の浪を分けかたちそやなひの浪ハとよりか
かやうなるそ此君給へうて一ちうし給

応天皇十五年甲辰八月百済王遣阿直岐〻能讀
經典即太子菟道稚郎子師之
天皇問曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是秀也
時遣荒田別於百濟徴王仁
十六年乙巳王仁来太子師之習諸典籍
欽明天皇十三年百濟獻經論

ゆうかきしは
唱頌 唱頌の秘事師説ある也
こゝろえおくへき也と
雅楽寮 職員令云雅楽寮頭一人乃至歌師四人儛
師四人笛師二人 唐國楽師十二人高麗楽師四人
百済楽師四人新羅楽師四人腰鼓師二人以下略之
あはすさきのかれぬからはなは

あすさ海は六楽説内事也
いかにしてそのかみたかくや
大和物語
雲井のよそにしらぬ月日のかけもこゝろにかゝるかな
かつらきのかみのきしに 山里 河様
となりの人 漢人
志かの海なくしては海士や漁子のしむかへとなりにけるを
こゝろあるとおほしくかりすこて
こゝろはよるのあさきかなしみつゝおはしけるかなさ
ふかくはいふらもとよりかくれにのかはらぬなかれとゝし
ねへこそは
阿弥陀経
極樂國土有七寶池八功德水充滿其中池底純以金沙
布地乃至池中蓮華大如車輪
あそこにあれはゝ内教 内典也

浄名居士云為在家公お家主し俗形にて戒行とは
凡人也て仏者なる人中俗塞是也居士
ゑ〜つい〜ゆゑ又しまわり凡夫同然今お家十化〜上
菩薩者云也

いるゝ〜にさとりてさこゝ俗にて
ちゝやいとらいるゝ
これ俗人乃乃〜十人仏なるゆゑ海〜
冷泉院御事也　先勅〜

れとは御ことばくゆく
冷泉院〜号人後なれ
つれいそれ人数
わとゆゑゆんとしとゆゑ

戒俗は新乃ゝ〜ゝゝ世ゝ〜ゝ人〜ゝ
ゝゝゝゝ〜ゝ乃〜ゝ
乃川乃波乃枕ゝ〜ゝ
奥会北京月対ゝ
〜ゝゝゝ〜ゝ乃〜ゝ
ゝゝ〜ゝ僧新俗正のゝ
ゝゝゝゝ〜ゝ

受戒　禁戒の仏也戒行ご恵解ゝ各別也
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

設自帝何益況彼仕場舉　天仙弾指恥聖賢割
心悲　高野山覺上人

或人ハ地んはえ給ふの
天道無親唯與善人
体数ニ善性人悪性人あり又孟子ハ性善荀子ハ性悪とあり
在明の月乃ゆくゑを見ぬ人のなをやは
しられわたるまて照くる月ハ月残る在明の心さし能ありや
節まへ給ふ月残りて光見えは秋の末つかたとあれは九月
下旬の頃なる頃衰固の花の咲十五日よりいちの月を
在明といふ
迮房卿續本朝往生傳云十五日以後月ヲ晨月ト稱スト云
在明とて十五日の後ハ名も残りけれは
親給ひ給ふをも木乃中こしいへさしや風乃さそひ皆く
とゆらみてもて木乃葉の露とあり秋乃露乃かけ
木の葉乃露のちりても所といへは月のゆくゑ也ハ空
治乃通路山路木立志きれ所なり化説中ト云ハ秋中

とくまり宿て
東志ぐれの中わきまとめのかりの初めて
志ぐれ山なにて見えハあれにて志ぐれこの心詞未見え
夜好中めと木陰なりくさめわりと秋中の露野
中の楓紅葉とかわくしかり秋中まてこえつらり
みえしけ志くれのなり見え桐壺の巻の寄村の巻も
秋はふかく同るなり何て今集の縁也ゑて用
志ぐの宿れ
みしぐるゝとこれは縁く秋さらぬハ念く
わしぐるゝとうこそそゝ秋の露またをねさきえそ露も
わく志ぐれてけゝ志ぐてゝ世乃行ゐを絶わゐ世をかねかたり
ゐえゐるれんとにるゐ乃紀くをとくらめとゝと
此黄鐘調ハ當時黄鐘調の比巴ハ風香調也比巴ハ黄鐘

調[illegible]わたるなり凡色ハ風香調迎風香調より松曲あり
松真操流泉曲 仍汉[illegible]調[illegible]色乃黄鐘調
笛八平調[illegible]掃部頭貞敏[illegible]調[illegible]
風香調 合笛黄鐘調 迎風香調 合笛一越調双調 黄鐘調 合笛
平調 清調 合笛平調盤渉調 是也 今世[illegible]黄鐘 笛大食調
双調 笛一越調 平調 笛盤渉調 [illegible]あり 委敷任
[illegible]
天架三間草堂石階松柱竹編憂 白氏文集
云[illegible]
後撰云 元長親王[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊行方へ 奥入月
月隈重山芳聲扇喩 止観
拾遺
月
秋[illegible]月[illegible]
後漢[illegible]
依通よ尋[illegible]
云漢書云扇月[illegible]
[illegible]通[illegible]
杜詩云月生初学扇雲細不成衣 水原
義甫詞裁
雲作 年衣
[illegible]
[illegible]
扇[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

或詩注曰月圓[illegible]故云月[illegible]

[illegible]

淮南子曰魯陽公與韓搏難戰酣日暮援戈而撝之日

為之反三舍

又史記曰魯陽以戈廻落日

又還撥不法[illegible]

日乃午[illegible]

陳王隨葉吹囀云我本胡兒吐氣如當我採頂雷踏屋

如泥石得士力危得鞭廻日光西沒東面若月年未去

緩々長曲

比巴の撥い[illegible]月[illegible]

又李嬌琵琶詩曰半月分絃上

王元長月詩曰於月如可明

吳均詩一篇一列作琵琶自辟親心覺照月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人命不停過於山水今日雖存明亦難保何縱心

今住惡法　夫注

雪山鳥唱云今日不知死明日不知死何故造作栖安

穩無常身

[illegible]

みなさかりのみだれ　至頭　文選　男カシラ十キ　女カシラ十キ
さくらにさくらにほひうつくしと見ゆる也
おもかげ　面影也
みよしのやへくもゐ遠山あらしにしらくもわかれまさるに
面白き也
あさぎりのたつやま　槙尾山　宇治也　室原国　椎本にも此山へかよふ
行く舟は人さへこほり道もとほるをやわかん
大堰まし　宇治川のみなと浪の枕に袖ぬらすあはれかな　秋のころ
ひを　和名　氷魚
後撰　月の比は宇治の川よりみなつる也
これはあをやなぎの糸ならぬ
さくら山の紅葉をさと月のくれゆくかなしさをえる
おもしろきかたちの名也　折也
あさみどりの
楼臺　日本紀
久しき山のなかにてありわかれたる風の葉の
かりの人をそへていざ行かむあ袖をぬらし
橋姫ハ宇治橋の神也
さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらむ宇治の橋姫
宇治乃橋姫ここに古今集あり
宇治橋　孝化天皇大化二年沙門道登始造之
さむきよはひとりまちける
うしさむる心の内をきる也　鶏ニ鶏とまる
あさくらにて
この次の世にはかめ山の神の森にてやまとに帰る
あさのかた　待乳也　経家　四年和歌

〽のつゞきてかゝり 侍人来へかゝり也
おぼしくさきのもとこそは 聖人初也
あしろさらは法師んせうてこそかへてあれたるみちの
目録しよあらんめくあしろめてらんれてさて侍
蜉蝣 無常の喩よとさわ 蜻日 朝生暮死虫也
西円法師ハやさて氷魚とやまりつゝよう風にくゆる
無常事也 蜉蝣ハ水よ生して父を待さめて無常乃
喩乃世の物の氷魚の名よからしならとつひれは
こりろ亘ハ事あれて氷魚つもりまてハ何乃異うたのう
つさ大方此物語をしうしめくハ不とつりあらわれさ
事なかるへし
かねのおなはしうしめさせ侍てこそ何ゝ見え給へつゝ
縫殿家 指貫 故ハ美給也 ひハやもとちから也

あさりを行し夢ゆあやしといハ花侍 請下
何の世乃つゝわり風さしにこそ乃ちりふたと
父を待つもこそてしのち
奥へ 来ありてほよりせん梅花父を待し
ころへいみよの松世恋りてゑやとすゑし
拾遺 松風入夜琴ぐいふ歌 さよの琴よ常の声せからふしつ道のあわれ
涼みしときもとらうまかとらりてみとも 無縁
ちつうりて侍りて 将也
ゆらのゑからうろなのつこし
繧衣 褒衣 和名
到らへまふさらハ見しさ侍ら衣さわら秋と不やうん
円 ふら衣のさわるこひハ古すハ風の色ハ多きやも侍らし

いつはりのなきよにすきもしこそ此山のまさ
しるもしさつまらさ夜あかしてはあかさくるよ
拾遺集　順
人とつりたらく　詐 イツハリ
こやよかくれのくちきみさりめくり也
ちとし　無藝法師
かくうつろやうくれのくちあつ様し
ゆ屋つさとく海におもひはたさはのもの
縄許 ナハ カタ　在仙臺 ゆくゆくさうし見
このよはしまいるしと　眼日
からのはせんきうとめいはち上とふりとくよかさくり
唐浮縁繧
あやしいわりのやうなきくく
蒼頡見鳥跡つくりて文字を作りしせ

しみのくいしのとくのみちすく
蠹 しみ 鐔 しみ 又白魚 和名 食書虫名 衣魚 月 紙魚 月
蛊蠹落書棚 韓文
杜陵詩積蠹鄙獄叙生苔 白氏文集
ははこしせとくやはやのかさんかも
かさねくろわたの年もふてへし残花をはふ人や
なつらん

第廿九　椎本

巻名

[illegible]

長谷寺事　在玄賓[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠方　遠近

[illegible]

圍碁　爰始作碁　双六、自天竺起〻〻又盈掌者中持流天皇三年禁制

弾碁　後漢書云梁云弾碁藝経弾碁両人対局白黒各十八枚先列碁相當更先弾也碁石局以石為之　先勘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

酎酔示　右示　河水示　一越調　元者　[illegible]示

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

物度乃道遠也屋てたゝ系と刻うかんを立て紙記
こゝろ刻めを所めのそさたらるをわれ代のゝ
系めくやあるくさゝ地わく作り
屋月さとをうたのうはやうの物
普通乃あゝ流たう屋風せむうゝ山庄なとゝ
古発うゝ調度ゆ代立るゆ地係骨ゆ行西式法細
紙めゝ用合ゆゝ地也遺屋風とゝ也又云あゝ流の海
風ゝうゝ地たのう東代云あゝ流ゆ度行とゆ月ゆ爆
てゝうゝうゝ地也ゝ秘物れ

一ゝ法てゝ代ゝゆさてゝ人あゝひ行人　楊人 北久破月音 高麗双調
さてゝ人てゝ孫ゝゆ系ゝゆゝ流ゝ法ゝ
てゝ色のゝゝむゝやてゝゝゝ
二度
ゝてゝとゝゝいてゝゝゝゝゝゝ

ゝ法あゝとゝゝ秘ゝゝやてゝゝゝあゝゝゝゝゝう屋
てゝゝゝ　催る系古
ゝ色てゝむゝゝゝゝ刻ゝゝゝ人あゝゝゝ地ゝゝゝ法
のゝゝゝ法てゝゝゝ
生弦ゝ　法流ゆゝ生ゝ家系ゝ倫ゝゝゝ
地ゝゝみゝ法古人ゝゝ法ゝ人ゝゝゝ古今屋ゆ人ゝゝゝ
三法ゝ地ゝゝゝ法ゝゝゝ代法ゝゝゝゝゝゝゝゝ法
ゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ代宮地ゝ氏系ゝ法ゝゝ地生法ゝ同神地
屋ゝゝゝゝ人ゝ　祇ゆ古人
ゝゝゝゝ代　殿上宮地
山橋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我屋ゝゝたのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

野にはしりてとらやありきたん

赤人奥入 [illegible]

むつかしこの河宮花紅仏人間の中に

水京 [illegible]

普通乃事いみかうしも若吳説事歟不審

野とはしてしてもや

奥入 [illegible]

故角 [illegible]

みいさてはしらかしこ行んも

かうのもとあきもしらかしも 唐詩 和哥 詩訓字

ちとこ序 [illegible]

なけのいと [illegible] 又哥ばさり

宰相中将行房卿に中納言みちより今又二秋庵

とはのり仍同じ分明也

七月ならひにかりやこゑふるたる秋乃きり

夫をこの代のちをもとをもとをもとをもとを

つもるつに文はうをもるをうに

九重

くはうをもくはう

離騒曰君之門多九重 以 王逸云天門凡有九重洛陽

城周圍門西向大道門九重也

白氏文集曰君門九重閉

うつ[illegible]くの 仲房

大[illegible]乳 [illegible]

[illegible]

香山大樹緊那羅於佛前彈瑠璃琴奏八万四千
音樂迦葉尊者忘威儀而起舞（大樹緊那羅経・法花文句才二奏二経）

乾闥婆王奏示直潤須弥震動大海騰波迦葉起舞
傳灯録

[illegible]

垂仁天皇七年戊戌七月當麻蹶速与出雲國野見
宿祢令捔力二人相対立各挙足相蹶則蹶折蹶速
之脇骨亦蹶折其腰骨敦之故奪蹶速地賜野見
宿祢是以其邑有要月折田ノ縁也

神亀三年令諸國始進相撲人
七月十六七月間相撲召仕せ廿六日内取小月廿日
（八月石合小月廿九日抜出小月廿八日也）

秋山[illegible]成[illegible]
悲哉秋之為氣蕭瑟　文選
秋ハ菩提門[illegible]感
[illegible]
傳教大師云當捨悪見諸縁事當發最勝菩提心
應當速向蘭若處於彼如来德阿弥陀佛執持
名号若一日乃至七日一心不乱　阿弥陀経
[illegible]
寿命八千不死冥〻長夜後生死　十住心論
親絶知門偶注長夜臺　月

むかしのなかに
（古今）
おもふともかくれぬなかの身ならましきてふこゝろもあらさらましを
かのたゆるまし三まいをなやすめん

傳教大師云以諸方便示閑靜攝心於彼得三昧
（菩薩戒疏）
我於佛法中知一行三昧所謂念佛三昧

ねてもさめてもわすられて
（六帖人丸）
あまのかはしのゝめわたるはつかりのなくねにつけてなみたのまされ
あきの月はいつもやかはるこそ
八月廿日のころありしあきの月いまおもひいてゝなかめつゝ
おもひしる
いまかはらぬこゝろのそこにいはねともしらせてしかな

史記曰孝惠帝崩太后哭泣不下（呂后本紀）
顔淵死子痛哭之慟

哭ハ泣とも涙ながらさけふ也歎の切なる時涙なくてなき（たるや）
きのふまてはおもはさりしを
（古今）
ちりぬへきはなにしかたしまほしくおもはさりしを
なけきよりなけきにわたる九月の夜をあかしぬ
（宮平郷下）
いかなるよのなかならむなきわたるかりにやおもひしらるや
袖の露くもれ　秋はたれ人もまたれぬ袖さらし（古今）（古今）
涙川ながれも
（伊勢物語）
我世をなかくとおもひし涙のみちにはこそ流れ
これはかりまことのこゝろをしられなりけり
なみたにもそこにはしるす
（伊勢物語）
あはれとおもふ心のなかにこそ青
（伊勢物語）
なみたにくれてなかるゝはなくもみえすもひとしれ
なかさかたにかけておもひしらむ
馬嵬
（帳云の料ゆ）

くろき紙よりかへしゝ清き絹の使使にかへたる也
これは山乃かすみにやけむりにやたてる名にや
みよし山のしらゆきふみわけて西もみなと山のあの
ゆのくもにこもれるいかゝいはむとするにやかく
これは四日月のかの川よ弱くあく志けるにいつくに
つれなく　氣に
あくめえる後りあれはん煮物のさまなるし

く源さ木下にてしけ　　　　帳者の調法也
ろつはいはと
物らむろうといふいはんの後乃ものとといろ
まくしさやうあ後く　あくむもりてきん

とうり花ゆうり　　鄙居
わく方に敷きてかふわか後にさもよせ所く後乃れ
床母屋よりあり此文母屋々かいりくわせ敷居
水原抄云　母屋もうせ所て後といふ母屋と見てるは
御簾絹にあてやはらか不重也と
東く母屋といふ此姫君の母かた也後母屋は姫君
の母かた方にゐるの北の方中母屋かりて母屋
にせし母後に家乃よりここに此姫君乃御ゆかん
ふくここにてつより

いはいらあいひ梅にもと源するんちて
えと源りしさ也とところ又音通とある故也
れ好んとろかくれとも　内会補奥尤
秋芽花あれをかき井よいつしくこれ母ゆかうといひしかとる

ものの心願あさからぬ
後撰 月
ことと振りやる袖とふりくるる
ものをこそ思へ
かくばかりこころのうちに思ひ
ひたすらこの事こいさらと
ひたすらこの事こいさらと
しかのお歌
我を人ともとめこそ
とものの歌ともとけやゆ世中のし
公とまこと 本性とうるる
これらの事をたづこのこと
水京物 ぬんも 菓子ふ指
菓子ふ指 菓子揉菊汲菓蔵
えをていのらしらめ
しらとれのもとにいこ

世ふあまとうれこうはこ
ちこそうこれ火
服忌八調度ハ毎地
ちこ
わまたもし里たこよ
くたてそたつ乃川
拾遺 秋のれしろたこ
れるこちのはこりわ
中蝶乃わるこれこ
乃ふもをこ
万 あさうしけこ
ゆさいこもわこ
もこ云用 凍雲合こ

わたなみ人てうらいたてうさ
髮鬚 月 なもてうひまを うとうもとうやうにせうを
ちうむうけうたうう推りもとむるさ家よりにううれ
六帖八九
かうとうれむうみのとうにさのうとうとうと家をせれ
月
武庫うさみううたるるるるもてつうれむうるわうにううん
仲元
近さ和みみうさうけうけううまううにうくさわうよりもう
之子干 帰言 秣其馬 毛詩漢廣
うこのエイヲ トクヒニ ミウマウハニ
うるくさわうこうもうやうう。うるうにうう。うるうにうう。
月ゆうう。やうもうう。うるうう。うるうう。うるうう。
俗る系 頁ゥ自ヤ 召
これとうにうるうとのうこうさうれうりつをうるうるうるん
ゆううえみうにうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうり 苻とうるうるうる事

牛女二
文選曰野人有快矣背而義苻子者欲献之公雖
有區人之意亦已疏矣 嵇叔夜与山巨源絶交書
注曰善曰列子曰宋國有田父常衣温麝至春白
謂其妻曰頁日之曠人莫知之以献吾君將有賞也
其室告之曰昔人有義我蔽耳桑莖苻萍子對
卿豪稱之卿豪取韋之
いもみのれうたいみ月いまうる 秣 潔 秣 本書 精を潔 秣
秣うれよりむかうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
れうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
はうれはよりるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
いうこれうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるう
梯とうるうるうる 又音通うるう

あさぎ　はなだ　みどり　のあるあと

交乃日もあさぎ　はなだ　みどりのうすくなること　紙の面のうすくなること

濃紫文　菫草文　服色黄也　黄いろ也

くろあをの一ぢ　紫文のあをのうすき也

かさねてゐる袖　はなだ　みどりのうすくなる

はなだ　みどりのうすくなるにて

文ありやうのふるいにて

琵琶　色のうせたるくすき也

紫乃うせたるくすき也　とりてよりしらべ

紫文　青の匂せ又白服ゐを通用紙の文も同

色也紫上　祖母乃服　はなだ　みどりのうすくなること

てゐるを文もくすきのうすくなること

を紫とゝあり又六条御息所　袖とゝ　はなだ

色のもゝこゝ　紙乃めんゝ紙也　し通巻新院御

服の時　源氏君文を紫乃色上

ふて　花紫　つまゝ袖ゝ也